

大和郡山の歴史と散策マップ

I 研究動機と研究目的

私は附中生の中でも数少ない「奈良県大和郡山市」に住んでいるが、それほど大和郡山市について詳しくはなかった。また、地元の小学校でも郡山城がなぜ城跡しかなく、お城は現存しないのかという学習はしなかった。そこで今回、地元である大和郡山に更なる理解を深めたいと考え、テーマに設定した。

この研究で、大和郡山の歴史や城・城下町の歴史の流れを知るとともに、現在の城跡や城下町に出向き、散策マップを作成し、昔と現在で城や城下町の変化したところを考察したい。

II 研究方法

- ・図書館へ行き、文献を探す。
- ・現在の城跡と城下町へ足を運ぶ。
- ・城や城下町の位置や情報などを散策マップにまとめる。

III 研究内容

1. 現在の大和郡山市について

面積…42.68km²

(広がり…東西9km・南北7km)

人口…90013人

人口密度…2109人／km²

特産物…赤膚焼、金魚グッズ、萬籩

隣接市町村…奈良市、天理市、生駒市、斑鳩町、安堵町、川西町



50km

←大和郡山市の位置（楕円枠内）

2. 大和郡山の歴史

郡山の歴史を語る上で紹介しておきたい人物は次のとおりである。

(1) 豊臣秀長

秀長は、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉の弟である。秀吉は、郡山に城を作らせ、大阪城を守ろうとした。1585年、秀長は秀吉と5000人の兵士とともに、郡山にやって来た。

秀長は「市」を郡山だけに限定し、町を栄えさせた。大阪の堺や橿原の今井、奈良などからも商売人を連れて来たため、今でも堺町、今井町、奈良町の町名が残り、また鍛冶町や紺屋町、豆腐町など内町13町が城下町の名残として残っている。

秀長が大和郡山に住んでいたのは5年半ほどであったが、その間ほとんど秀吉に代わり大阪城を預かっていたため、実際に住んでいたのはごくわずかであった。しかし、その短い間に郡山の町を栄えさせ、城下町を発達させた。

※ 箱本制度

秀長により実施された自由な町方自治の制度のことである。

豆腐町、紺屋町などの内町と呼ばれる十三町では、1ヶ月ごとに交代して仕事をする仕組みがあった。商売をすることに税金をかけない代わりに

①郡山の町を守る ②火事を防ぐ ③お金を集める ④もめ事を裁く

という仕事をし、当番の町に朱印箱を回していた。秀長の時代に始まり、江戸末期まで続いた。

(2) 柳澤吉里

幕府の老中である柳澤吉保の長男として生まれ、23歳のときに甲府藩の殿様となった。1724年、8代将軍吉宗により「大和国郡山藩」に国替えを命じられた。

郡山藩は、京都の天皇を守ることや、奈良・京都の火消しの人件費、また毎年の日照りや国替えのため、藩の経営が苦しいものだった。そこで、お金を節約したり、家来への給料を減らしたり、商人から借金したりした。また「藩札」という、藩の中だけで使うことのできるお金を作って、なんとか藩を立て直そうとした。このようにして藩の政治はお金に苦労しながらも江戸時代が終わるまで5代にわたり藩主を務めた。

※ 金魚

大和郡山は金魚養殖が盛んであるが、それは柳澤吉里が甲斐国から郡山へ入城したとき家臣の中に金魚飼育を得意とする者が持ち込んだことに始まると伝えられている。江戸時代は侍の趣味として飼育されていたが、江戸時代末期になって暮らしに困る侍の間で趣味とお金儲けを兼ねた金魚作りが盛んになっていった。明治になると最後の藩主である保申が職を失った侍を救うため仕事としての金魚生産を進めた。そのための研究所を作り、品種を工夫したり、販売先を広げたりすることにも乗り出した。

3. 城の歴史

(年)

1580	天正8	筒井順慶が郡山城を与えられて入城
1585	天正13	豊臣秀長が入城、本格的な築城始まる。
1588	天正16	徳川家康、郡山城へ来る。
1590	天正18	豊臣秀吉、秀長の病氣見舞いに郡山城に来る。
1595	文禄4	増田長盛が入場し、外堀を普請。
1600	慶長5	関が原の戦で西軍敗北し、郡山城は徳川方に明け渡され、建物は伏見城に移築される。
1615	元和元	大坂夏の陣により城下焼討にあう。その後城主となった水野勝成が本丸御殿などを作事する。
1619	元和5	水野忠明は備後福山城に移り、替わって松平忠明が大坂城から入城し、二の丸館の造営にかかる。以後二の丸館が藩主の居所となる。
1639	寛永16	松平忠明は姫路城へ移り、本多政勝が郡山城に入城。
1679	延宝7	松平信之が入城する。
1685	貞享2	松平信之が下総古川に移り、本多忠平が宇都宮から入城。以後4代続く。
1724	享保9	柳澤吉里が甲府から入城。明治維新まで柳澤家が城主を務める。
1871	明治4	廃藩置県。全国で残された城は58城。廃城は144城。大和の郡山と高取城も廃城。
1873	明治6	郡山城売却処分のため入札される。続いて解体、搬出される。



↑ 追手門



↑ 本丸跡



↑ 追手東隅櫓

4. 城下町の歴史

秀長の時代には、南都（奈良）を凋落させ、箱本制度という自由な町方自治の制度を実施し、内町13町に地子免除の特権を与え同業者の特権を図った。その政策のもとで城下町は大きく発展した。

豊臣時代に城下町の大半ができあがった。

◎江戸中期の「町鑑」

内町→27町（地子免除地）・・・本家852軒、借家1003軒、人口7038人

外町→13町（年貢地）・・・本家613軒、借家1088軒、人口6022人

医師→59人（本道、針医、外科、目医師、歯医師）

造酒屋→38軒

職人→422人（指物屋、表具師、武具鍛冶系、鏡磨、笠張、綿打など90種）

商売（呉服屋、米屋、油屋、味噌屋、餅屋、綿屋「郡山繰綿」）

職人町として鍛冶町、紺屋町、大工町。商人町として茶町、藺町、塩町、魚町。
出身地名の町として奈良町、堺町、今井町。



←現在の堺町



←現在の紺屋町
（祖母が生まれ育った）



←現在の塩町

5. 当時と現在の比較

- 本丸には関が原の戦以降、天守閣が再建されなかったようだ。二の丸は藩主の居住場所などがあったが、現在は県立郡山高校の敷地となっている。
- 五軒屋敷は、現在の郡山図書館や市役所の一部
- 外堀、内堀ともに埋められているところも多い。
- 町の区画（内町）に変わりはない。
- 本丸の堀は残っている。
- 当時の武士と町人の居住地の境目となっていた堀は現在も八幡堀として残っている。
- 町の名前は当時から現在まで同じ
- 当時外堀のあったところが一部残され外堀公園となっている。
- 柳町大門のすぐそばには牢屋や髪結い所があった。



←私が作成した散策マップ

IV ま と め

大和郡山市は古くからの歴史がある場所だということがわかった。

私の祖母は郡山城の近くに住んでおり、今回の自由研究にあたり、話を聞いてみた。

それによると、城跡には、数十年前まで、現在の柳沢家の当主にあたる方が住んでいたそうである。その方は、国立奈良教育大学の学長を今されているという。そのお母様にあたる方は、祖母が若い時に近隣の人々から「お姫さん」と呼ばれていたそう。また、祖母自身も若いとき実際にお話したこともあるという。気さくな方だったそう。その話を聞いて、今でもまだ歴史が続いているということを実感した。

また、自分自身で実際に現在の城跡や城下町を訪ねて、ところどころ当時の様子が見える部分が残っていて、大和郡山市が昔どんな町だったのかがわかった。

V 感 想

実地調査をして、城下町の範囲の広さを改めて感じた。また、見つけた門の跡から、当時の城周辺の町並みを想像するのが楽しかった。文献調査を始めるのが遅かったものの、中学校最後の自由研究として、ふさわしいものができたと思う。

VI 参考文献

- ・大和郡山市、大和郡山市教育委員会「大和郡山歴史ものがたり」大阪書籍（1999年）
- ・「よみがえる日本の城」学研（2004） 中井均
- ・「復元大系日本の城5 近畿」ぎょうせい（1992） 坪井清足・吉田靖・平井聖
- ・下高大輔、高田徹「大和郡山城」城郭談話会（2009）
- ・「大阪、近畿〈1〉の城下町」平凡社（1996） 高橋洋二
- ・鈴木正幸、藤井譲治 他13名「中学社会 歴史的分野」日本文教出版株式会社（2012）
- ・大和郡山市「ふるさと大和郡山歴史事典」ぎょうせい（1987） 大和郡山市文化財審議会
- ・<http://www.city.yamatokoriyama.nara.jp/> 大和郡山市